

8. アレルギー性鼻炎に対するヒスタグロビンの鼻内エアロゾルの効果

赤坂 徹（埼玉医大）

有田昌彦、林 義久、松本貴美子、

朱 博光、新谷 仁（昭和大）

古川 漸（順天堂大）

○富田有祐、城 宏輔（慈恵医大）

古屋二六、椎名房代（東邦大大橋病院）

向山徳子、春田有二（同愛病院）

<対 象>

アレルギー性鼻炎またはアレルギー性鼻炎と気管支喘息を合併している症例47名である。

<方 法>

対象を2群に分け、一方にはヒスタグロビン ¼ vial (26症例)、他方には ⅓ vial (21症例) を週3回、4週間鼻内エアロゾル投与した。

<効果判定法>

a. 鼻症状（表1）

治療前の鼻症状と比較して、試験終了後に下記のごとく判定した。すなわち、アレルギー日記をもとに、くしゃみ、鼻汁、鼻閉の1日平均より症状の程度を求め比較した。

b. 医師の総合判定

a. および試験期間の全経過を参考に、医師の印象により、著効、有効、やや有効、無効、不明の5段階に判定した。

<併用薬剤>

気管支喘息を合併した症例においては喘息治療薬の併用はさしつかえないものとしたが、鼻症状に対しては出来るかぎり使用しないこととした。

<成 績>（表2、3、4、5）

表2～5のごとくであり、ヒスタグロビンの鼻内エアロゾルは、アレルギー性鼻炎の非特異的局所療法とし有効であるという結果を得た。

表1 鼻症状の効果判定表

効果判定	段 階 的 な 差
消 失	卅 → 一、卅 → 一、十 → 一
著明改善	卅 → 十
改 善	卅 → 卅、卅 → 十
不 変	卅 → 卅、卅 → 卅、十 → 十
悪 化	一 → 十、一 → 卅、一 → 卅、十 → 卅、十 → 卅、卅 → 卅
不 明	一 → 一

表2 1回の投与別有効率

1回の用量	症例数	総合判定					有効率	
		著効	有効	やや有効	無効	悪化	有効以上	やや有効以上
¼ バイアル群	26	4	10	7	5	0	53.8%	80.8%
⅒ バイアル群	21	2	3	1	5	0	23.8%	76.2%

表3 重症度別有効率

	症例数	総合判定				有効率	
		著効	有効	やや有効	無効	有効以上	やや有効以上
重症	6	3	0	0	3	50.0%	50.0%
中等症	25	2	9	10	6	44.0%	84.0%
軽症	14	1	4	8	1	35.7%	92.9%

表4 病型別有効率

	症例数	総合判定				有効率	
		著効	有効	やや有効	無効	有効以上	やや有効以上
くしゃみ・鼻汁型	20	2	7	8	3	45.0%	85.0%
鼻閉型	9	3	1	1	4	44.9%	55.6%
くしゃみ・鼻閉型	18	1	5	9	3	33.3%	83.3%
計	47	6	13	18	10	40.4%	78.7%

表5 効果発現時期

(やや有効以上を解析)

1回の用量	症例数	効果発現時期				2週間以内での効果発現症例
		1週以内	2週以内	3週以内	4週以内	
¼ バイアル群	21	6	10	5	0	76.2%
⅒ バイアル群	16	4	6	5	1	62.5%